

## クルグズ（キルギス）共和国における国家語の形成 ——ステータス計画・コーパス計画・国家語委員会の活動を中心として——

小田桐 奈美

本報告の目的は、クルグズ共和国における「国家語」概念を明らかにするとともに、「国家語」が形成される過程を検討することである。その作業を通して、言語の側面からソ連解体後のクルグズ共和国における国家建設の様相を明らかにすることを目指した。

ソ連解体以降、クルグズ共和国を含めた旧ソ連諸国における言語政策の展開は、多くの研究者の注目を集めている。従来の研究の特徴としては、まず比較研究が多いことが指摘できる。その中で、クルグズ共和国は国家語の発展を妨げる複合的な条件を備えているため、旧ソ連諸国の中でも特に国家語政策の成果が小さい国として指摘され、問題点や課題が提示されることが多かった。だが、そのような研究においては、クルグズ語が国家語として形成されていく過程が過小評価されていたといえる。また、そもそも「国家語とは何か」という問いも詳細に検討されずにいたことも指摘できる。よって、一貫した「国家語の形成」という観点から近年の言語政策の展開を再検討する必要がある。

以上の先行研究の検討を踏まえ、国家語の形成過程を主に以下の3つの観点から分析した。

- ①ステータス計画（言語政策のうち、言語の外的な側面に関する計画）
- ②コーパス計画（言語政策のうち、言語の内的な側面に関する計画）
- ③国家語委員会（国家語の発展・推進を担う機関）

本報告では、主な一次資料として法令、政策文書、新聞記事、政策関与者の著作やメディアにおける発言等を用いた。また、現地調査時に行った観察・聞き取り記録も用いた。

ステータス計画の観点からは、クルグズ共和国の文脈における国家語概念を明らかにするために、言語法等を通して国家語の機能がどのように規定されてきたのかを考察した。その結果、1989年以降国家語は国家・社会活動のすべての領域で機能する言語として位置づけられてきたことが明らかになった。また、1989年当時「国家語」はよりクルグズ民族と結びつく概念であったが、その後はより国家権力、国民と結び付けられる概念へと変容してきたことが判明した。

コーパス計画の観点からは、クルグズ語が国家語の機能を満たすためにどのような言語で

あることが求められてきたのかを検討した。その結果、コーパス計画はステータス計画で提示された枠組みを実施するために必要不可欠な役割を担っていることが判明した。さらに、クルグズ語が国家語の機能を満たすために、クルグズ語の正しさ、純粋さ、豊富さが追求されてきたことが明らかになった。

国家語委員会の観点からは、まず、国家語委員会の活動内容や位置づけを考察した。次に、国家語委員会主催の行事や議長の言説を分析し、その中で国家語概念がどのように捉えられているかを探求した。その結果、国家語委員会は、ステータス計画とコーパス計画において極めて重要な役割を担っていることが明らかになった。また、行事や議長の言説の分析を通して、国家語としてのクルグズ語は、クルグズ民族の言語としてばかりではなく、民族に関わらない国民の言語であると位置づけられていることが判明した。

このように、ステータス計画、コーパス計画、国家語委員会の活動を通し、様々な角度から国家語であるクルグズ語の定義付けがなされ、理念上国家語の境界が画定されつつあることが明らかになった。クルグズ共和国における国家語は、1989年以降、民族の言語、国民の言語、また時にはより広い地域間関係の言語としても位置づけられており、様々な形の“we”と結び付けられる重層的な言語になりつつある。

今回提示した結論は、あくまで政策レベルにおける国家語の形成を検討した結果得られたものであり、他の研究成果（マイノリティ言語話者を対象とした研究など）とすり合わせていく必要がある。また、日常生活におけるクルグズ語使用の変化が、政策レベルの国家語の形成とどのように絡み合っていくのかを考察する必要がある。さらに、今後は旧ソ連地域以外において歴史的に存在してきた諸国家語／国語の中で、クルグズ共和国の事例がどのような位置づけにあるのかを明らかにしていきたい。

(筑波大学大学院博士前期課程)